

オバマ大統領が今年のノーベル平和賞に輝きました。まだ実績を何も出していない大統領に対しノーベル平和賞が授与されることには、ちょっとした吃驚（ビックリ）なニュースです。

授賞理由として、ノーベル賞委員会は「核兵器のない世界に向けたビジョンと働きに特別な重要性を認める」とし、「国際政治に新たな環境をもたらした」と評価したとのこと

です。国際的な外交と人々への協調を推し進めた努力も高く評価し、「世界によりよい将来の希望を与えた」と称賛しています。しかし、これは、ちょっと、誉め過ぎです。

広島・長崎で被爆し、今まで地道にこつこつと、核廃絶を訴えてきた方々の努力が、今回の授賞理由であるオバマ演説を引き出したとも考えられ、原爆を世界で唯一投下した国の大統領と合わせ、世界で唯一被爆した名も知れぬ活動家に対し、かつての田中耕一（ノーベル化学賞）さんのように、授与されたら、もっと素敵であったと思います。

また、マスコミの一部から、今度のオバマ大統領がノーベル平和賞を受賞したことが、ノーベル平和賞の価値を下げたとの声が聞こえて来ることもなかったと思います。

平和・核廃絶といえ、作家の原民喜を思い出します。原民喜のエッセイに「平和への意志」というのがあります。

「二つの特輯が私の心を惹いた。知識人戦線（個性七月号）と平和の擁護（近代文学八月号）と、これは近頃、最も意義ある特輯だつたが、かうした特輯は今後も絶えず繰返して為されなければならないし、何度繰返しても多すぎるといふことはあるまい。極言すれば戦災死をまぬがれたわれわれにとつて、これこそは最大の、そして最後の課題なのだ。

一九四五年八月六日、言語に絶する広島の惨劇を体験して来た私にとつて、八月六日といふ日がめぐり来ることは新たな戦慄とともにいつも烈しい疼きを呼ぶ。三度目の夏に、私は次の如くノートに書き誌しておいた。

三度目の夏に

お前が原子爆弾の一撃より身もて避け、全身くづれかかるもののなかに起ちあがらうとしたとき、あたり一めん人間の死の渦の叫びとなつたとき、そして、それからもうちつづく飢餓に抗してなほも生きのびようとしたとき、何故にそれは生きのびようとしなければならなかつたのか、何がお前に生きのびよと命じてゐたのか 答へよ、答へよ、その意味を語れ！……」

という行から始まり、

「平和の擁護、平和への協力は、絶えざる忍耐と緊張を一人一人に要請するであらう。今日己れと己れの周囲を少し静かに顧みれば、戦争のために存在した嘗ての環境が、いかに人間全体の心理を病的に歪曲したか、現に今も傷害してゐるかは、あまりにも明かなこ

とがらである。この地獄と抵抗して生きるには無限の愛と忍耐を要する。」  
という行で結んでいます。

かつて、佐藤総理大臣が世界に宣言した、「核兵器を持たず、作らず、持ち込まさず」の非核三原則でノーベル平和賞を受賞しています。

しかし、アメリカの核の傘の下で平和が保たれている日本で、本当に『持ち込まさず』ができていたのかという疑惑が常にあり、極東安全保障の戦略上、アメリカ軍の艦船の中には、日本ではないという密約で、事実上、陸揚げされないにしても、日本領海内に持ち込むことを容認する密約があったのは、事実との見解が大勢を占めています。

今回のオバマ大統領のノーベル平和賞受賞も、アフガン増派を含め、平和に対する実効性に対し疑問の残る政策は多々ありますが、核廃絶の成果に期待します。

しかし、同じく現職でノーベル平和賞を受賞したトーマス・ウッドロウ・ウィルソン大統領が米議会の反対で、自分が発案した国際連盟に米国が参加しなかったような事態には、決してならないようお願い致します。



#### 読売：「オバマ氏平和賞『欧州では威光健在？』記者も驚き」(10/10)

オバマ大統領は9日、ホワイトハウス・ローズガーデンで、詰めかけた100人以上の記者団に対し、早朝に電話でノーベル平和賞授与の知らせを受けたことに関し、「このような形で目を覚ますとは思わなかった。驚き、恐縮している」と述べた。

驚いたのはホワイトハウス担当記者も同様。ある米国人記者は、「我々は、就任直後に希望を振りまいていた大統領の姿を思い出せなくなっているのに。欧州では、オバマ氏の威光は健在なのか」と首をかしげた。

大統領は、当初の予定から約45分も遅れて声明を発表。窓越しに、執務室で難しい顔をしてぎりぎりまで声明の文面を推敲(すいこう)する姿が見えた。



< 田中耕一 (1959-) >

化学者・エンジニア。東京大学医科学研究所客員教授。東北大学工学部卒業。名誉博士(東北大学)。富山県富山市に生まれ。島津製作所フェロー(部長待遇)。

2002年ノーベル化学賞受賞。受賞理由は「生体高分子の同定および構造解析のための手法の開発」。

受賞当時は島津製作所に勤める会社員であり、会社員のノーベル賞受賞として日本国内で話題となった。2007年時点で、化学分野において、「博士の学位」「修士の学位」「専門職学位」を保持しないノーベル賞受賞者は、田中耕一のみである。なお博士の学位を保持しない同賞受賞者としては、チャールズ・ペダーセン(日系人)について2番目である。



< 原民喜 (1905-1951) >

詩人、小説家。広島県広島市熾町に生まれ。慶應義塾大学英文科卒業。

昭和10年、処女作品集「焰」を自費出版。昭和11年頃より、雑誌「三田文学」を舞台に短編小説を多く発表。

昭和17年、千葉県立船橋中学に英語教師として就職。

昭和20年、郷里の広島の兄の家に疎開し、8月に原爆投下にあう。この体験は「夏の花」(昭和22)、「鎮魂歌」(昭和24)などの作品を生む。

代表作は「夏の花」、「廃墟から」、「壊滅の序曲」、「鎮魂歌」、「原爆小景」など。



### 春秋：「どっきりカメラ」(10/10)

ノーベル賞ほど秘密に満ちた賞はない。候補者の名も審査の過程も極秘。受賞者への通知は発表当日までない。7年前に化学賞を受けた田中耕一さんは、ストックホルムからの電話に「どっきりカメラかと思った」と本気で驚いていた。

物理学賞と化学賞では学術機関のスウェーデン王立科学アカデミーが、世界中の科学者の仕事をひそかに観察している。やや性格が異なるのが平和賞である。「人類の幸福と平和に尽くした人物や団体」を決めるには、政治的な判断は避けられない。選考するのは、隣国ノルウェーの国会が任命した5人の委員だ。

今年その5人が選んだのは、核廃絶を唱えたオバマ米大統領だった。あっさり、きっぱり評価を下すのは、世界の風に敏感な小さな国だからこそできる業だろう。ノルウェーの人口は500万人足らず。米国や中国が平和賞を設けても、世界の人々は納得しまい。小国には、大国が真似(まね)できない潔い発信力がある。

平和賞をノルウェーに丸投げする奇抜な方式は創始者アルフレッド・ノーベルが、遺言に書き残していた。隣国同士が連携し、友好を保つための置き土産だったという説がある。現職の政治家を背中から押すようにして称(たた)えるのも、北欧の知恵なのだろうか。世界を驚かせた受賞に、平和へのメッセージを感じる。

<アルフレッド・ベルンハルド・ノーベル(1833-1896)>

ダイナマイトの発明で知られる化学者、実業家。ノーベル賞の提唱者。スウェーデンのストックホルム生まれ。

知人の化学者アスカニオ・ソブレロが発明した爆薬、ニトログリセリンを、初めて実用化。さらにこれを改良し、安全に使えるようにしたダイナマイトを発明。



ダイナマイトは工事現場での岩盤の破壊など、作業の効率化を進めるものとして広く普及、同時に戦争にも爆薬として使用される。

その贖罪か、遺言状に、ダイナマイトで築かれた遺産を使って賞を作り、科学技術、文学、平和など合計5部門に貢献した人物に賞を贈るように記載されており、現在の「ノーベル賞」となっている。

### 日経社説：「核兵器なき世界への行動促した平和賞」(10/10)

今年のノーベル平和賞に、オバマ米大統領が決まった。「核兵器なき世界」の実現を唱え、世界の将来に希望を与えたのが受賞理由だ。ノルウェーのノーベル賞委員会は、国連の役割を尊重した国際協調、対話重視の紛争解決、地球温暖化問題での建設的な役割なども重視した。

大統領は今回の受賞を「行動への要求」と受け止めた。米国とオバマ氏自身の今後の貢献への期待を込めた平和賞である。これを機に、核軍縮をはじめ国際社会の懸案解決に、

一段と指導力を発揮してほしい。

オバマ大統領は、単独行動の目立ったブッシュ前政権下では考えられなかった新機軸を打ち出した。特に「核兵器なき世界」を唱えた4月のプラハ演説は、国際社会に新風を吹き込んだ。「核兵器を使用した唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任がある」。率直な発言は、唯一の被爆国として核廃絶を目指す日本でも共感を呼んだ。

先月には、核不拡散・核軍縮に関する国連安全保障理事会の首脳級会合を主宰し、「核兵器なき世界」を目指す決議を採択させた。ロシアとは7月の首脳会談で、12月に失効する第1次戦略兵器削減条約（START1）で定めた戦略核弾頭の保有上限を約3分の1に減らす、核軍縮条約の年内締結で合意した。

真価を問われるのはこれからだ。北朝鮮やイランの核開発など、実際の核拡散は強まっている。こうした現実の脅威をどう抑えるかは、日本にとっても切実な課題である。

世界的な核管理体制には既存の核保有国に有利な面もある。米議会はいまだ包括的核実験禁止条約（CTBT）を批准していない。ロシアや中国とともに、米国が率先して核軍縮の実を上げる必要がある。

地球環境問題では、中国と並ぶ温暖化ガス排出国である米国の対応にはまだまだ課題が残る。オバマ氏が唱える温暖化ガス削減案は、鳩山由紀夫首相の提案に比べてなお小幅である。医療改革を巡る議会との対立で、地球温暖化対策法案が年内に上院を通過する公算は極めて小さい。内向きになっている米議会をどう説得するかが、大きな課題である。

オバマ氏が外交の柱に掲げ米軍を増派したアフガニスタンも安定化にはほど遠い。オバマ政権が発足してからまだ1年に満たない。今回の受賞は多くの宿題を抱えたオバマ氏が、真の実績を上げるために背中を押したものと受け止めるべきだ。

大統領は11月に来日する。「核なき世界」を日米主導で実現するためにも広島や長崎を訪ねてほしい。

### 天声人語：「核なき世界へ」(10/10)

一読したとたんに胸に突き刺さり、ノートに書き取っておいた一首がある。おそらくは今も宇宙を走りゆく二つの光 水ヲ下サイ。岩井謙一さんという戦後生まれの歌人が詠んだ。二つの光とは広島と長崎に投下された原子爆弾のことだという。

「水ヲ下サイ」はあの日、地の底からわくようにして空へのぼっていった、瀕死（ひんし）の声、声、声だろう。光も声も、消えてはいない。いまま暗黒の空間を飛び続けている。歌人の想像力は、原爆の「原罪性」を、読む者に突きつけてくる。

罪深い兵器を廃絶して、「核なき世界」をめざそうと唱えるアメリカのオバマ大統領が、今年のノーベル平和賞に決まった。現職の国家首脳の受賞は、9年前に韓国大統領だった故金大中氏が、南北和解への貢献を理由に受賞して以来になる。

オバマ氏は、何かをなしての受賞ではない。だが歴史的とされるプラハ演説を源に、核軍縮の川は流れ出した。国連安保理も巻き込んで川幅は広がっている。それを涸（か）らしてはならないという、ノーベル賞委員会の意思表示でもあろう。

長崎で被爆した作家の林京子さんが、この夏、小紙に語っていた。「人間らしい形を残さない姿で死ぬ人たちを見ました。人間がこんなにおとしめられていいのか、という思いが私の原点です」。同じ思いを、オバマ氏の原点にもしてほしいと願う。

燃え残り原爆ドームと呼ばれるもの残らなかった数多（あまた）を見せる 谷村はるか。聡明（そうめい）な大統領のこと、被爆地訪問がかなうなら、必ずさまざまな真実を「見る」はずである。

< 林京子 (1930-) >

小説家。本名は宮崎京子。長崎県長崎市出身。長崎医科大学附属厚生女学部専科中退。

長崎高等女学校（現・長崎県立長崎東中学校・高等学校）在学中に市内大橋にある三菱兵器工場に学徒動員で被爆。爆心地に近かったが奇跡的に助る。



1963 年被爆者手帳を受ける。その体験を書きつづった『祭りの場』（『群像』1975.6）で第 18 回群像新入文学賞および第 73 回芥川賞を受賞。原爆を特権化する姿勢に批判もあり、「原爆ファシスト」と呼ばれた。

著書に『上海』『三界の家』『やすらかに今はねむり給え』『長い時間をかけた人間の経験』など。

### 朝日社説：「ノーベル平和賞 オバマ変革への深い共感」(10/10)

核のない世界をめざす。地球温暖化問題に真正面から取り組む。単独行動主義はやめ、国際協調と対話でさまざまな問題にあたる。彼の発した「チェンジ」のメッセージが、それほどまでに世界の人々の心を揺さぶったということだろう。

ノーベル賞委員会は今年の平和賞に米国のバラク・オバマ大統領を選んだ。就任から1年もたたない政治指導者に贈られるのは極めて異例のこと。授賞理由のなかで委員会は、オバマ氏が「大統領として国際政治において新たな機運を作り出した」と、核廃絶構想をとくに評価した。

世界が直面する気候変動に果敢に挑むなかで、「建設的な役割を果たしている」とも評した。

粘り強い交渉で中東和平合意や、北朝鮮の核危機の回避をもたらしたカーター元米大統領に、平和賞が贈られたのは02年だった。地球温暖化問題で国際世論を盛り上げたアル・ゴア元米副大統領には07年に授与した。

いずれにも、当時のブッシュ政権への批判がこもっていた。

オバマ大統領への授与は、グローバル化が進み、国際協力なしに対応できない地球規模の問題が深刻化する世界での、米国の新たな指導力に期待を示したものと言えるだろう。確かに、オバマ大統領の登場で国際社会の様相は大きく変わった。

9月には国連安全保障理事会で議長をつとめ、「核のない世界」を目指す決議を採択する立役者となった。米口間では、戦略核兵器削減に関する新条約が年内に締結される見込みだ。核実験した北朝鮮、核開発疑惑のあるイランとの対話による打開もさぐっている。地球温暖化では国連の枠組みのなかで対応する姿勢を強調してきた。

難題ばかりだ。どこまで成果に結びつくかは未知数な部分が多い。アフガニスタン戦争も出口がなかなか見えない。ノーベル平和賞を受賞したからと言って、国際社会の複雑な利害対立が解けるわけでもない。

だが、それも承知で委員会は、オバマ流の国際政治こそ、初の授賞から108年の間ずっと後押ししようとしてきたものだ、とたたえている。

むろんオバマ大統領が無謬（むびゅう）であるはずもない。それでも、希代の指導者による挑戦を頓挫させることは、世界の公益に大きなマイナスとなる。

オバマ大統領は来月12日に日本を訪れ、鳩山首相と会談する。日米同盟は今や、日本や極東の安全保障だけでなく、地球規模問題への対応で力を合わせていく同盟である。

とくに、核廃絶に向けた戦略は日米の緊密な協力が欠かせない。オバマ大統領という「世界の資産」を最大限生かしていくためにも、首脳会談を大事にしたい。

### 編集手帳：「核廃絶の理想」(10/10)

描きたい風景は頭のなかにあり、絵筆も握ってはいるが、キャンバスはまだ真っ白のままである。そのキャンバスが名画として激賞され、権威ある美術賞に選ばれたとしたら、画家は喜ぶよりも先に悩み、苦しむだろう。

脳裏の構図を絵の具と筆でいかにして形にし、賞の重みに堪える絵に仕上げていくか…。今年のノーベル平和賞に選ばれた米国のオバマ大統領はいま、作品があまりに早く絶賛されてしまった画家の心境かも知れない。

大統領の打ち出した 核兵器なき世界 はまだ構想の手前、願望に近い手つかずの絵である。「称賛とは借金のようなもの」と、褒められることの重圧を語ったのは英国の詩人サミュエル・ジョンソンだが、その重圧を梃子（てこ）にして「絵」の完成を迫るのがノーベル賞委員会の意思であったろう。

「核廃絶」の理想と「核の抑止力」という現実をどういう線で結ぶのか 賞をいわば“前借り”してしまった大統領の筆遣いを世界の目が見つめている。

唯一の被爆国である日本には、白いキャンバスの前で大統領と一緒に悩む使命があるだろう。悩むだけの価値がある「絵」である。

<サミュエル・ジョンソン(1709-178)>

イギリス(イングランド)の文学者。リッチフィールド生まれ。オックスフォード大学中退。シェイクスピアの研究で知られる。

「英語辞典」(1755年)の編集、この業績によりオックスフォード大学より文学修士号。



1754年キングスカレッジ(後にコロンビア大学と改称)創立とともに、初代学長兼教授に就任。

1759年小説『ラセラス』を執筆。1765年シェイクスピアの戯曲集を刊行。1776年に法学博士号を得る。

クラブでの談論風発を好み、1764年にジョシュア・レノルズの呼びかけで文学クラブ(The Literary Club)の創設に参加。また、週1回の夜、居酒屋(tavern)で食事の後に文学談義などを楽しむ集まりで、ジョンソンの機知に富んだ話が会話の中心となり、多くの言葉を残す。

語録に「腐敗した社会には、多くの法律がある。」「政府は我々を幸せにすることはできないが、惨めな状態にすることはできる。」「結婚は多くの苦悩を生むが、独身は何の喜びも生まない。」「怠け者だったら、友達を作れ。友達がなければ、怠けるな。」など。

### 読売社説「ノーベル平和賞 オバマ『変革』への大きな期待」(10/10)

意外性があるだけに強い印象を与える授賞発表だ。今後の行動に大きな期待がかかる。2009年度のノーベル平和賞は、オバマ米大統領に決まった。

平和賞を選考するノルウェーのノーベル賞委員会は、授賞理由について、国際的な外交と人々との協力関係を強化するために大統領が示してきた「比類なき努力」をあげた。

とくに、「核兵器のない世界」を目指す大統領の構想とその働きに、「特別の重要性を認める」と称賛した。大統領の下、米国が、核廃絶や軍縮、気候変動や人権など、国際的な課題に建設的な役割を果たしている、としている。

オバマ大統領は、唯一の超大国である米国の対外イメージを大きく変えた。それが、今回のノーベル賞決定の背景にある。

一国主義的行動をとりがちだったブッシュ前政権とは対照的に、国際協調外交を前面に掲げ、「チェンジ（変化、変革）」は可能だと呼びかける真摯（しんし）な態度が、米国の好感度を高めた。

世界経済危機、核拡散、地球温暖化、感染症など、世界が共有する難問の解決には、各国の連携はもちろん、それを束ねるための強力な指導力が不可欠である。

オバマ大統領への授賞には、混迷する世界の舵（かじ）取りを、共感しうるビジョンを持つ強い米国に託したい思いもこもっている。

現職大統領へのノーベル平和賞としては、2000年の金大中・韓国大統領に次ぐ。故金大統領の場合、民主化や南北首脳会談開催などの実績が評価された。

米国の現職大統領としては、日露戦争終結を仲介したセオドア・ルーズベルト、国際連盟の生みの親だったウッドロー・ウィルソンに次ぐ90年ぶりの受賞となる。

就任9か月のオバマ大統領の場合、期待が先行しているきらいがある。今後、いかに実のある成果を上げるかが重要な課題だ。

米国が最重視するアフガニスタン情勢は混迷を深める一方だ。タリバンが攻勢を強めるなか、今後の対応については、一層の増派か戦略の転換か、政府部内でも見解が割れている。

北朝鮮やイランの核問題も、まだ解決への具体的な成果は上がっていない。核実験全面禁止条約（CTBT）の批准など米国が率先して実行すべき問題も残る。

受賞を機に、オバマ大統領には平和実現へのさらなる努力を期待したい。同時に、各国指導者も協力しなければならない。

### 余禄：「オバマ大統領の平和賞」(10/10)

「国家間の友好、軍隊の廃止または削減、および平和会議の開催や推進のために最大もしくは最善の仕事をした人物に与える」。開封されたノーベルの遺書には、その遺産で設ける五つの賞の最後にこう記されていた。

ノーベル平和賞を生んだ文言だが、そこには軍備の廃止・縮小にむけた理想が読み取れる。しかもこの賞の選考だけは自国スウェーデンの機関でなく、当時連合を組んでいた隣国ノルウェーの国会が指名する委員会があたるよう言い残した。

「賞は国籍にかかわらず、ふさわしい人物が受賞しなくてはならないというのが、とくに明示する私の希望である」。そう遺言を結んだノーベルの遺志に従えば、核兵器廃絶を打ち出したオバマ米大統領が今年のノーベル平和賞に選ばれたのは、当然の結果といえるのかもしれない。

だが実にウィルソン以来となる現職米大統領の平和賞受賞である。しかも就任9カ月の大統領の受賞に驚きの声があがるのもこれまた当然だ。なかには結果責任が問われる現実政治家に対し、早すぎる道義的栄誉の授与はひいきの引き倒しになりはせぬかとの意地悪な声も出る。

だが米大統領が国連安保理議長席に座り「核が地球上から消えるまで、われわれは歩みを止めてはならない」と訴える世界を1年前まで世界の人々は想像できたろうか。「国際政治の新たな潮流を生んだ」というノーベル賞委員会の声明は決して過大評価とはいえぬかもしれない。

道義が世界を変えるという人類の希望を担うことになったオバマ氏には与えられた栄誉を現実政治に生かす知恵が求められる。まず11月の来日で広島・長崎をぜひ訪れていただきたい。

<トーマス・ウッドロウ・ウィルソン(1856-1924)>

第28代アメリカ合衆国大統領。バージニア州ストーントン生まれ。1919年ノーベル平和賞を現職で受賞。歴代大統領の中でももっとも学究肌の人物で、米大統領(唯一)在職中に、ジョンズホプキンス大学より博士号を取得。



ニューヨーク州知事を経て大統領選に立候補。共和党の混乱により大統領に当選。当選後は「新しい自由」(ニュー・フリーダム)というスローガンを掲げ、進歩主義的改革を実施、折からの第一次世界大戦には中立を守るが、再選後の1917年に第一次世界大戦に参戦。

翌年、極めて理想的色彩の強い14ヶ条の提案(Fourteen Points)を提唱、民族自決、秘密外交の廃止、軍縮、国際的な平和機関の設立などを訴えた。

1919年のパリ講和会議では14ヶ条実現のために活発に活動するが、最終的に英仏の現実主義に押される形で理念の実現は不十分な形となる。

上院の反対によってヴェルサイユ条約の批准に失敗、ウィルソンの理想を一部なりとも

実現した国際連盟にアメリカが参加しないという事態を招いた。

#### 毎日社説：オバマ氏平和賞 さあ次は理想の実現だ（10/10）

就任から9カ月。まだ1期目を始めたばかりの米大統領がノーベル平和賞を受けることに驚いた人も多いただろう。それだけオバマ大統領の「核兵器のない世界」構想が世界を揺り動かしたということだ。折から11月の訪日も決まったオバマ大統領に、心からお祝いを言いたい。

「核なき世界」構想は、なにもオバマ氏の専売特許ではない。キッシンジャー元米国務長官ら元米高官たちも核兵器全廃を提唱し、米国政治の一つの潮流になっていた。オバマ氏受賞の背景には、こうした米国の歴史的な動きも挙げられよう。

だが、オバマ氏自身の活躍は目覚ましかった。ブラハで4月に「核なき世界」演説をした際、唯一の核兵器使用国として核軍縮に努める「道義的責任」に言及したのは、実に潔い覚悟の表明というべきである。

7月の伊ラクイラ・サミットでは核兵器全廃に向けた首脳声明採択を根回しし、9月には国連安保理の首脳会合で自ら議長を務めて「核なき世界」の決議を全会一致で採択した。てきぱきと議事を進める大統領の姿は、核軍縮と平和へ向かう世界の足取りを象徴するようにも映った。

また、米露間の火種になっていた東欧ミサイル防衛（MD）計画の見直しを発表し、第1次戦略兵器削減条約（START1）に代わる核軍縮条約でもロシア側と合意した。ブッシュ前政権下で「新たな冷戦」とも言われた米露の冷たい関係は大きく修復された。「国際政治の新たな環境を作り上げた」という授賞理由は、決して大げさではない。

核問題だけでなく、エジプト・カイロでは中東和平やイスラムとの融和を含めた演説を行い、地球温暖化対策でも指導力を発揮している。初の黒人でありイスラム教徒を祖先に持つ米大統領として、世界の民族・宗教の融和のシンボリック的存在になっていることも無視できない。

だが、オバマ氏へのノーベル賞を苦々しく思う人々のことも忘れてはならない。中東和平は進展せず、「オバマのベトナム」とも言われるアフガニスタン情勢は悪化する一方だ。北朝鮮の核兵器やミサイル、イランの核開発の脅威も増している。オバマ政権下で世界は平和の果実を必ずしも味わっていないのだ。

これからオバマ氏に問われるのは、うたい上げた理想を実現する実行力である。来月アジアを歴訪するオバマ氏は、どんなに同盟国・日本が北朝鮮の核兵器やミサイルに脅かされているか、そして広島・長崎の人々がどんなに大統領訪問を待ち望んでいるかを肌で知ってほしい。それこそ「核なき世界」への新たな出発点になるのではないか。オバマ氏の戦いを日本も全力で応援したい。